

或る郷の物語（エピソード・その1）

（この郷にとつて、外せない偉人ゆえ取り上げたく）

唐人お吉と新渡戸稲造

唐人お吉の悲運を知った教育者がいた。当時旧制一高の校長であり東京帝大教授も兼任する日本の指導的知識人・新渡戸稲造である。

その新渡戸稲造が、下田を訪れた。

そして、お吉が身を投げた稲生沢川に地藏尊を建立。眠っている宝福寺に多額の寄付を行った。「国難を救う」犠牲者となったお吉に同情してやまなかつたのである。

新渡戸稲造は、米国留学、米国人女性との結婚、そして国際連盟などで活躍した経験を以って英文で『**武士道**』を執筆し、日本の際立った精神文化を西洋へ紹介した。これは、単なる知識としてではなく、道徳心や美学として日本を理解させる発信であったという。そういう人物なら、お吉に人一倍同情したのも頷ける。

伊豆の踊子の川端康成。

作品「雪国」「千羽鶴」そして「古都」の一連の制作でノーベル賞を受賞した。それらの日本の伝統美と現代的感性が融合した表現が、日本文学研究者である米国人エドワード・G・サイデンステッカー教授の英訳によって世界中に高い評価が広がった。

「伊豆の踊子」はそれらの作品の前に書かれたものだが、『**古風な日本美**』の抒情的な表現が高い評価を受け、前述の教授等によつて、The Izu Dancer (The Dancing Girl of Izu)と広まって人気を得た。

作品は、川端二十二歳の時、全寮制の旧制一高をふらりと出奔、伊豆・湯ヶ島温泉の湯本館で書かれた実体験「湯ヶ島の思い出」

がベースとなっている。やがて、ここで尾崎士郎や梶井基次郎などとも交流、川端は狩野川が流れるこの地を、第二の故郷として愛し逗留した。

なお、独特の死生観を抱いて、作家人生の悲しい幕を自ら閉じてしまったのは残念な思いがする。(逗子にて死去)

思うに、新渡戸稲造と川端康成には、活躍分野や時代の違いはあるものの、西洋文化の波が強まる中で、「**日本独自の美意識を再発見して世界へ伝える**」という大きな成果をもたらした。

(次回赤手蟹に続く)